



# TOEIC® テストの新形式問題における パート2の難易度を再推察する ——ETS 作成問題の分析を通して——

井 上 治

**概要** 本論では、前回のリニューアル以降に出版された ETS 作成による公式問題集を、「リニューアル後の初期」のもの、「リニューアル後の後期」のもの、そして、「今回のリニューアル」のものという3つの段階に分け、総計390問の Part 2 の問題について、「質問文の語数」、「質問文の種類」、そして、「質問文に対する誤答の選択肢」という3種類の観点から分析を行なう。そして、10年ぶりの改定となった TOEIC® リスニング&リーディング テストにおいて、「今回のリニューアル」の Part 2 の問題がリニューアル以前のものとのちがいがあのかどうかをみることを通して、新形式問題における Part 2 の難易度を再推察する。

**キーワード** TOEIC® リスニング&リーディング テスト, リスニング・セクション パート 2, 公式問題集, 難易度

**原稿受理日** 2017年5月17日

**Abstract** The purpose of this paper is to respeculate whether the level of difficulty of the questions in Listening Section Part II of *TOEIC*® Listening & Reading Test has increased or decreased. The reason for considering this is because the form of the exam questions has been partially revised for the first time in ten years. The 390 questions of Part II by ETS analyzed here are divided into three groups: the questions made “in the early years after the last revision,” “in the late years after the last revision,” and “in the current revision.” The questions are also analyzed and compared from the three points of view: “the number of words in the question sentences,” “the types of question sentences,” and “the distracters to the question sentences.” On the basis of these analyses, the level of difficulty of the Part II questions in the new test is respeculated on.

**Key words** *TOEIC*® Listening & Reading Test, Listening Section Part II, Official practice book, Level of difficulty

## 1. はじめに

前号の『生駒経済論叢』に掲載した論文において、2016年5月29日実施の公開テストから新しい出題形式が導入された *TOEIC*<sup>®</sup> Listening & Reading Test (以下、*TOEIC*<sup>®</sup>) について、その Part 2 の難易度がどのように変わるのかを推察した。そして、Part 2 の質問文について3種類の観点から分析を行ない、「新形式問題における Part 2 の 難易度は下がることが予想される」という結論を出した。

しかし、そのような結論を下したと同時に、その論文において行なった難易度の予測は、2016年2月発刊の『*TOEIC*<sup>®</sup> テスト 公式問題集 新形式問題対応編』(以下、『新形式』) に掲載されたわずか50問を分析の対象にするしかなかったという点で、今後発刊される公式問題集に掲載される Part 2 の問題を分析していくことが必要であることも述べた。

そして、その後、2016年10月に『公式 *TOEIC*<sup>®</sup> Listening & Reading 問題集 1』(以下、『問題集 1』) が、2017年2月には『公式 *TOEIC*<sup>®</sup> Listening & Reading 問題集 2』(以下、『問題集 2』) が相次いで発刊されたので、本論文では、新たに合計100問の Part 2 の問題を分析することを通して、前回の予測が正しいものであったのかどうかを考察してみたい。

Part 2 の難易度を予測しようと試みた理由であるが、それは以前から Part 2 がリスニング・パートの出来・不出来を決める要のパートであると感じてきたからである。Part 1 は写真を見ながら答える問題であり、当然、写真が正答にたどりつくことができる大きな情報となっている。そして、Part 3 と Part 4 では質問文と選択肢がプリントされている。この2つのパートは難易度の高いパートではあるが、見方を変えれば、正答にたどりつくための多くの情報が「プリントされた質問文と選択肢」という形で提供されているといえる。そして、それらの情報をあらかじめ読んで把握しておく必要があることから、この2つのパートでは、リスニング能力だけではなくリーディング能力も試されている。それに対して、Part 2 は問題冊子には何もヒントが載っていない、純粋にリスニング能力が試されるパートになっている。ヒントが何もないので、どの受験者もこのパートについては、「今日はきちんとできるのだろうか」と不安になる。しかし、この Part 2 について十分な練習を積んでいれば、ここを高い正答率で通過できるようになり、受験者は「今日もきちんとできている」と安心することができ、リスニング・パートにおける最大の難関である Part 3 を自信と余裕をもって戦うことができるのである。そういうわけで、新形式に移行

した TOEIC® における Part 2 の難易度がどのようになるのかということに大きな関心をもったわけなのである。

そして、前回も述べたように、新形式においては、受験者がリスニング・パートで最も取り組みやすい Part 1 の問題数が4問減り、その次に取り組みやすい Part 2 の問題数も5問減り、しかも、それぞれのパートに出題形式の変化はなかった。それに対して、もともと最難関のパートである Part 3 については、問題数が3セット(9問)増えるだけでなく、「3人の話し手による会話を聞いて答える問題が出題されます」、「会話中の表現の意図を問う設問が出題されます」、「図表を見て答える問題が出題されます」(『新形式』16)というような出題形式の追加もなされたのである。

このように、取り組みやすいパートの問題数が減り、難しいパートの問題数が増えたことから、新形式の TOEIC® ではリスニング・パート全体の難易度が上がったと容易に推測できる。しかし、TOEIC® を運営する国際ビジネスコミュニケーション協会は、「スコアの持つ意味や難易度に変更はありません」(『新形式』9)と述べている。このことから、新形式では Part 2 の難易度が下がるのではないかと仮定してみたわけなのである。

本論文では、公式問題集に記載されている、ETS (Educational Testing Service) 作成による総計390問の Part 2 の問題を、前回と同様に、「前回のリニューアル後の初期」のもの(2005年発行の『TOEIC® テスト 新公式問題集』[以下、『Vol. 1』])と2007年発行の『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 2』[以下、『Vol. 2』])、「前回のリニューアル後の後期」のもの(2012年発行の『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 5』[以下、『Vol. 5』])と2014年発行の『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 6』[以下、『Vol. 6』])、そして、「今回のリニューアル後」のもの(『新形式』、『問題集1』、および『問題集2』)という3つの段階に分け、「質問文の語数」、「質問文の種類」、「質問文に対する誤答の選択肢」という3種類の観点から分析を行なう。そして、「今回のリニューアル後」の Part 2 の問題と「今回のリニューアル以前」のものとのちがいを明らかにすることを通して、前回行なった予測を再検証してみたい。

本論文で引き続いてこのような検証を行なう理由のひとつは、先ほども述べたように、前回の論文以降に2冊の公式問題集が発刊されたことであるが、もうひとつの、そして、大きな理由は、2017年4月からは団体特別受験制度(IP: Institutional Program)においても新しい出題形式のテストがスタートしたことである。

近畿大学経済学部では、毎年12月に1年生から3年生までのほぼ全員が TOEIC® を IP で受験している。つまり、2017年の12月には、2016年12月には旧形式で受験した2年生

(2017年7月受験も必須となっている国際経済学科の学生を除く)と3年生のほぼ全員が、いきなり新形式で受験することになるのである。彼らの不安を取り除き、彼らにスムーズに受験してもらうためには、新形式についてさまざまな角度から検討し、彼らに少しでも多くの情報を事前に提供する必要がある。その一環として、新形式の Part 2 の難易度を再検証してみようということなのである。

## 2. 「質問文の語数」から検討する

まずは、「質問文の語数」という観点から、Part 2 の新形式問題における難易度を予測してみたい。前回、基本的に語数が多いと音声的にも長い質問文となり、質問文が長いと質問文の内容を把握しにくくなるため問題の難易度は上がること、また、基本的に質問文の内容を把握できれば正答にたどりつける確率は格段に高くなるため、質問文が長い(質問文の語数が多い)場合には問題の難易度は上がることになることを述べた。

表1 質問文の語数の平均値

	Vol. 1	Vol. 2	Vol. 5	Vol. 6	新形式	問題集 1	問題集 2
TEST 1	9.2	8.23	7.67	8.67	8.4	8.08	8.84
TEST 2	8.73	8.17	7.63	8.67	8.56	8.12	8.28
TEST 1 + 2	8.97	8.2	7.65	8.67	8.48	8.1	8.56

上の表1は、各公式問題集に収載されている2回分の「練習テスト」のそれぞれについて、Part 2 の質問文(『Vol. 6』までは各30問、『新形式』以降は各25問)の語数の平均値(小数点以下第三位を四捨五入)を算出したものである。そして、前回では、『Vol. 1』と『Vol. 2』の平均値は $1,030\text{語} \div 120\text{問} = 8.58\text{語}$ 、『Vol. 5』と『Vol. 6』の平均値は $979\text{語} \div 120\text{問} = 8.16\text{語}$ 、『新形式』のみでは $424\text{語} \div 50\text{問} = 8.48\text{語}$ であり、「リニューアル後の初期」→「リニューアル後の後期」→「今回のリニューアル」という3段階での推移は、 $8.58\text{語} \rightarrow 8.16\text{語} \rightarrow 8.48\text{語}$ となっていた。

今回の分析分を加えると、「今回のリニューアル」(『新形式』、『問題集 1』、『問題集 2』)の平均値は $1,257\text{語} \div 150\text{問} = 8.38\text{語}$ となり、その数値は前回の分析時のものとほぼ変わらない。そして、『新形式』、『問題集 1』、『問題集 2』におけるそれぞれの数値は、多少のこぼこはあるものの、『Vol. 5』と『Vol. 6』のあいだの数値に見られるような大きな変化はない。そして、この8.38語という数値は、今回分析した390問の平均値である3,266語

TOEIC® テストの新形式問題におけるパート2の難易度を推察する（井上）

÷390問＝8.37語とほぼ同じ数値である。このことから、分析した290問の平均値である2,433語÷290問＝8.39語の前後を推移していくのではないかとこの前回の分析は正しく、新形式問題における Part 2 の質問文の語数は、8語台中盤前後の数値を推移していくと考えられる。以上のように、「質問文の語数の平均値」という観点からは、今回の分析を加えても、新形式問題における Part 2 の難易度は変わらないであろうことが考えられる。

いっぽう、前回の分析において、Part 2 の難易度がやや上がることを予測するデータとなった「質問文の語数の分布」については、今回の分析を加えたデータから難易度の変化を予測できる数値が読み取れるだろうか。

表2 質問文の語数の分布

	6語以上	7語以上	8語以上	9語以上	10語以上
Vol. 1+Vol. 2	92.5	81.7	65	41.7	25.8
Vol. 5+Vol. 6	92.5	78.3	60	37.5	27.5
新形式	100	86	76	48	24
問題集1	92	78	56	38	26
問題集2	90	82	66	54	36
新形式 合計	94	82	66	46.7	28.7

	11語以上	12語以上	13語以上	14語以上	15語以上
Vol. 1+Vol. 2	19.1	14.2	10.8	4.2	2.5
Vol. 5+Vol. 6	13.3	3.3	2.5	0.8	0.8
新形式	10	4	0	0	0
問題集1	16	4	2	0	0
問題集2	14	6	4	4	2
新形式 合計	13.3	4.7	2	1.3	0.7

上の表2は、表1で分析したものと同一 Part 2 の質問文に関して、ある語数以上の質問文の数が質問文総数に占めるパーセンテージ（小数点以下第四位を四捨五入）を算出したものである。前回は10語以上に関して、「10語以上」、「12語以上」、「14語以上」という3段階の表記にとどめていたが、今回は、「10語以上」から「15語以上」までの6段階で表記し、さらに、数値のまちがいを一部修正した。まず注目すべき点は、前回において『新形式』では6語未満の質問文がなくなっていることを指摘し、新形式問題ではすべての質問文が6語以上になる、すなわち、やや難化することを予測したが、『問題集1』と『問題集2』において、“Whose glasses are these?”（『問題集1』TEST 1-16番），“Is

the doctor in today?”(『問題集1』TEST 1-19番)，“Isn't the museum closed now?”(『問題集2』TEST 1-21番)，“Which office is Kathy's?”(『問題集2』TEST 2-10番)といった例にみられるように、100問中9問において6語未満の質問文が登場していることである。したがって、「リニューアル後の初期」→「リニューアル後の後期」→「今回のリニューアル」という3段階での6語未満の質問文の分布の推移は、7.5%→7.5%→6%となり、そして、新形式問題の最新の2冊での割合が9%であることから、6語未満の質問文は変わらない割合で引き続き出題されること、すなわち、難化傾向にはならないことが予測される。

次に、『新形式』では「6語以上」から「9語以上」までの割合が高くなっていることから、新形式問題では「6語以上」から「9語以上」までの、特に「8語以上」の質問文の増加を予測した。『問題集1』と『問題集2』を加えた今回の分析では、割合が高くなっている語数が「6語以上」から「10語以上」までというように少し幅が広がったが、「10語以上」の数値も「リニューアル後の後期」の「10語以上」の数値とほぼ変わらない。そのいっぽうで、「9語以上」の数値は、前回と同様に、「リニューアル後の初期」と「リニューアル後の後期」の両方の数値を5ポイント以上上回っているものの、前回「リニューアル後の初期」と「リニューアル後の後期」の両方の数値を10ポイント以上上回っていた「8語以上」の数値に関しては、今回の分析では突出した数値ではなくなっている。このように、「8語以上」の質問文の割合が落ち着きをみせたことから、前回の分析時よりもやや易化の傾向が予測される。しかし、今後注視しなければならない点が出てきており、それは、新形式問題の最新の『問題集2』だけの数値に注目すると、「7語以上」から「10語以上」までの割合が高く、さらに、「9語以上」と「10語以上」の数値が、「リニューアル後の初期」と「リニューアル後の後期」の両方の数値を10ポイント前後上回っているということである。このような数値の急上昇の理由が、『問題集1』における易化に対する調整でないとすれば、このパートの難化を予示するものと考えられるため、以降発行される新形式問題の傾向を注目していかなければならない。

最後に、前回の『新形式』のみの分析では、「14語以上」(実際は「13語以上」)の質問文に関しては1問も出題されておらず、また、「10語以上」と「12語以上」の質問文に関しても、「リニューアル後の後期」の出題の割合からほぼ横ばいの数値であることから、新形式問題においてこの数値が大きく上がることは予測しづらいことをみた。そして、今回の分析を加えても、「10語以上」から「15語以上」まですべて、「リニューアル後の後期」の出題の割合からほぼ横ばいの数値であることから、前回の予測が正しかったことがいえ

る。ただし、ここでも注意しておかなければならないことは、上でみたことと同様に、新形式問題の最新の『問題集2』だけの数値に注目すると、『新形式』と『問題集1』には1問もみられなかった、“How about stopping at that new coffee shop on our way to work tomorrow?”（『問題集2』TEST 1-14番），“Will the fliers be ready today, or do you need more time to finish them?”（『問題集2』TEST 1-24番）のような「14語以上」の質問文が復活していることを含めて、「10語以上」から「15語以上」まですべて、「リニューアル後の後期」の出題の割合を上回っているということである。この点についても、新形式問題全体のバランスを取っているだけのものなのか、あるいは、Part 2の難化を予示するものなのか、今後の新形式問題の傾向に注意を払わなければならない。

前回においては、新形式問題において、6語から9語の質問文が7割を超え、10語以上の質問文の割合が減少する傾向は、TOEIC® 上級者にとってはPart 2が易化することを示しているが、6語未満の短い質問文が減少し、8語と9語の質問文が増加する傾向は、TOEIC® 初級者にとってはPart 2がやや難化することを予測した。しかし、今回の分析では、『問題集2』のみにおける数値の増加を横に置いておくと、6語未満の短い質問文が変わらない割合で出題されることがわかり、8語の質問文が急激な増加傾向にはないことがわかり、その8語の質問文の減少分が10語以上の質問文の増加分に転じているが、その割合は「リニューアル後の後期」の割合にほぼ戻っただけであることがわかった。

すなわち、近畿大学経済学部の1年生の多くの学生の目標は400点～450点、そして、2年生の多くの学生の目標は450点～500点であるが、彼らがその目標を達成できるように筆者が攻略法をさまざまに示してきたTOEIC® 初級者にとっては、「質問文の語数」という観点からは、今回の分析では前回の予測とは異なり、Part 2の難易度は「リニューアル後の後期」のそれとほぼ変わらないことが予測できる。

### 3. 「質問文の種類」から検討する

次に、「質問文の種類」という観点から、Part 2の新形式問題における難易度を再度予測してみる。質問文の種類については、前回と同様に、国際ビジネスコミュニケーション協会が発行している公式問題集以外のTOEIC® 対策本である『TOEIC® テスト 公式プラクティスリスニング編』のPart 2の章立てを基本として、「WH 疑問文」、「Yes/No 疑問文」、「選択疑問文」、「依頼・許可・提案・勧誘の文」（以下、「依頼・提案の文」）、「付加疑問文と否定疑問文」（以下、「付加・否定疑問文」）、「肯定文と否定文」の6種類に分類

する。

表3 質問文の種類分布

	Vol. 1	Vol. 2	Vol. 5	Vol. 6	新形式	問題集1	問題集2
WH 疑問文	45	41.7	45	41.7	42	46	40
Yes/No 疑問文	13.3	15	8.3	10	14	10	12
選択疑問文	8.3	6.7	6.7	6.7	6	8	8
依頼・提案の文	11.7	8.3	8.3	13.3	14	16	12
付加・否定疑問文	10	15	15	15	16	12	18
肯定文と否定文	11.7	13.3	16.7	13.3	8	8	10

	1 + 2	5 + 6	新形式 合計
WH 疑問文	43.3	43.3	42.7
Yes/No 疑問文	14.2	9.2	12
選択疑問文	7.5	6.6	7.3
依頼・提案の文	10	10.8	14
付加・否定疑問文	12.5	15	15.3
肯定文と否定文	12.5	15	8.7

上の表3は、表1と表2で分析したものと同一 Part 2 の質問文に関して、6種類それぞれの質問文の数が質問文総数に占めるパーセンテージ（小数点以下第四位を四捨五入）を算出したものである。まず、「WH 疑問文」に関しては、今回の分析を加えても、「リニューアル後の初期」や「リニューアル後の後期」とくらべて数値に大きな変化はみられず、新形式問題においても安定して40%強（25問中10問、ないしは11問）の出題が予測される。次に、「Yes/No 疑問文」に関しては、「リニューアル後の初期」から「リニューアル後の後期」で大きく下がった数値が「今回のリニューアル」において元の数値に回復していることを前回指摘した。今回の分析においても、多少数値は下がったものの二桁のパーセンテージを維持していることから『Vol. 5』のように一桁になることは考えづらく、やや下方修正した12%から15%のあいだ（25問中3問、ないしは4問）を推移していくことが想定される。続いて、「選択疑問文」については、今回の分析においても数値は安定しているが、新形式問題の最新の2冊においては25問につき確実に2問ずつ出題されていることから、前回（6%前後「25問中1問、ないしは2問」と想定）よりもやや上方に修正した8%前後（25問中2問）の出題を想定したい。さらに、「依頼・提案の文」については、前回の分析において、『Vol. 6』からみられる数値の上昇が『新形式』においても継



続していることを指摘し、新形式問題における15%前後（25問中3問、ないしは4問）の出題を予測した。今回の分析を加えた数値も同様の傾向がみられるため、「依頼・提案の文」については、「リニューアル後の初期」と「リニューアル後の後期」よりも出題数が増加する傾向が続くことが予測できる。そして、「付加・否定疑問文」に関しては、今回の分析においても「リニューアル後の初期」からの安定した数値は変わらず続いており、今後も15%前後（25問中3問、ないしは4問）の出題が確実に想定される。最後に、「肯定文と否定文」に関してであるが、前回の分析において、「リニューアル後の初期」から「リニューアル後の後期」までずっと継続していた二桁のパーセンテージが、『新形式』において初めて一桁になり、しかも、「リニューアル後の後期」の数値から半減していることを指摘し、新形式問題においては8%程度（25問中2問程度）の出題になることを推測した。今回の分析においても、『問題集2』ではかろうじて二桁のパーセンテージにのったが、大きな数値の上昇はみられず、「今回のリニューアル」の数値は8.7%とやはり一桁台のままである。この結果から、「肯定文と否定文」に関しては、この一桁台の出題傾向は今後も続き、やや上方修正した8%から10%程度（25問中基本的には2問、ときおり3問の可能性）の出題を予測する。

今回の分析を加えた結果からあらためて考えると、前回の分析と同様に、新形式問題においては、「肯定文と否定文」の出題数が減り、その代わりに「Yes/No 疑問文」と「依頼・提案の文」の出題数が増えることが予測される。そして、「WH 疑問文」、「選択疑問文」、「依頼・提案の文」、「付加・否定疑問文」という4種類の質問文の出題数は毎回ほぼ安定した数値となり、いっぽうで、「Yes/No 疑問文」と「肯定文と否定文」のあいだでは出題数のバランスが取られ、「肯定文と否定文」の出題数がときおり3問になる際には「Yes/No 疑問文」の出題数が1問減って3問になることを予測したい。そして、前回みたように、疑問文の形式をとらないことから、「事実を述べる」、「意見や感想を述べる」、「命令をする」というようにその内容が幅広くなるこの「肯定文と否定文」という質問文は、その応答のパターンも多様化するため、ほかの5種類の質問文の問題とくらべると、問題の難易度がかなり高い。その難易度の高い「肯定文と否定文」について、今回の分析の追加によって、その出題数が減ることがよりはっきりと想定できたので、新形式問題のPart 2の難易度は前回の予測どおり下がることになる。

前回「質問文の種類」という観点から検討した最後に、多くの日本人英語学習者にとって苦手な3つの文法事項である、「否定疑問文」、「現在完了形、または、現在進行形」、「受動態」のうちの2つが組み合わされた質問文が、『新形式』においてまったくなくなって

いることを指摘し、その点からも新形式問題の Part 2 の難易度は下がることが予測できるとした。しかし、今回追加分析した『問題集 1』と『問題集 2』においては、「リニューアル後の初期」において 5 問、「リニューアル後の後期」において 7 問出題されていたこの種類の質問文が復活し、“Why hasn't Jason been in the office all week?”（『問題集 1』TEST 1-31 番），“Why has the workshop been canceled?”（『問題集 1』TEST 2-28 番），“Why has the roadway been blocked?”（『問題集 2』TEST 1-13 番），“The rental car has been returned, hasn't it?”（『問題集 2』TEST 1-30 番）というように合計 4 問出題されている。新形式問題の最新の 2 冊において 2 問ずつ出題されていることから、今後出題されないのではないかという前回の予測は修正しなければならない。

ただし、「否定疑問文」、「現在完了形、または、現在進行形」、「受動態」のうちの 2 つが組み合わされた質問文の出題数については、今後の出題傾向に注目しなければならないことはもちろんのことであるが、現時点では「リニューアル後の初期」と「リニューアル後の後期」における出題数を上回っているわけではない。いっぽう、難易度の高い「肯定文と否定文」の出題数が減るであろうことは確実だと考えられるため、「質問文の種類」という観点からみた新形式問題の Part 2 は、前回と同様に、その難易度が下がることを予測したい。

#### 4. 「質問文に対する誤答の選択肢」から検討する

今回の分析においても、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は 100% 不正解である」と「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85% が不正解である」というふたつの攻略法を取り上げ、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点から、Part 2 の新形式問題における難易度を予測してみる。

まず、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は 100% 不正解である」についてである。

表4 WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える誤答選択肢の分布

	Vol. 1	Vol. 2	Vol. 5	Vol. 6	新形式	問題集 1	問題集 2
WH 疑問文	16.7	16.7	9.3	21.4	21.7	15.2	7.5
選択疑問文	50	25	0	0	0	12.5	25
	1 + 2		5 + 6		新形式 合計		
WH 疑問文	16.7		15.5		15.2		
選択疑問文	38.9		0		13.6		

上の表4は、これまでに分析してきた Part 2 の質問文に対する選択肢に関して、WH 疑問文（「WH 疑問文の形をとる依頼・提案の文」を含む）の誤答の選択肢の総数に対して Yes/No で答える選択肢の数が占めるパーセンテージを、さらに、選択疑問文についても同様のパーセンテージを算出したものである（それぞれ小数点以下第四位を四捨五入。また、数値のまちがいを一部修正した）。

前回の『新形式』の分析においては、まず、WH 疑問文の誤答の選択肢において Yes/No の選択肢が占める割合は、「リニューアル後の初期」と「リニューアル後の後期」の両方の数値を上回った。「WH 疑問文」の質問文の数が質問文総数に占める割合には変化がなかったことから、この数値の上昇は、新形式問題において Yes/No で答える選択肢の数が減ることはなく、むしろ増える可能性が高いことを、すなわち、新形式問題における Part 2 の易化を示すものとした。いっぽう、選択疑問文における Yes/No の選択肢については、「リニューアル後の後期」に引き続いて『新形式』においても出題がなかったことから、新形式問題ではこの Yes/No の選択肢はおそらく出題されないことを推測した。

ところが、今回の分析結果をみると、前回のそれぞれの予測が外れていたことがわかる。まず、WH 疑問文の誤答の選択肢に Yes/No で答える選択肢が占める割合は、『新形式』→『問題集 1』→『問題集 2』において、21.7→15.2→7.5というように大きく数値が下がってきている。さらに、『問題集 2』の TEST 1 では、これまでずっと TOEIC® における誤答選択肢の定番であったこの Yes/No の選択肢がまったく出題されないという現象まで起きており、これだけを見ると、WH 疑問文に Yes/No で答える選択肢は近い将来に出題されなくなる可能性があることまで考えられる。しかし、今後の出題傾向を注意してみいくことがもちろん必要ではあるが、「リニューアル後の初期」→「リニューアル後の後期」→「今回のリニューアル」という3段階での数値の推移をみても、16.7→15.5→15.2であり、「今回のリニューアル」の中でみられるような数値の急激な下降が起きているわけではない。また、今回の分析をしていて筆者が感じたことであるが、『新形式』で

極端になった出題傾向を『問題集1』と『問題集2』で調整(表4)することで、また、『問題集1』で極端になった出題傾向を『問題集2』で調整(表1と表2)することで、「リニューアル後の後期」の数値と変わらないようにしようとする傾向が見受けられる。この2点のことを踏まえると、新形式問題においてWH疑問文にYes/Noで答える選択肢は「リニューアル後の後期」とほぼ変わらない割合で出題されるであろうと想定できる。したがって、WH疑問文にYes/Noで答える選択肢という観点からみた新形式問題におけるPart2の難易度は、前回の「易化する」から「変わらない」に修正することになる。

次に、選択疑問文にYes/Noで答える選択肢についてであるが、“Will we focus on advertising in print media or online?”という質問文に対する“Yes, it looks great.”という選択肢(『問題集1』TEST 1-27番)、“Does the train leave from Platform twenty-four or Platform twenty-five?”に対する“No, it’s running on time.”(『問題集2』TEST 2-20番)、そして、“Did you buy the coat online or from a shop?”に対する“No, the line isn’t very long.”(『問題集2』TEST 2-14番)のように、『問題集1』と『問題集2』において、「リニューアル後の後期」以降途絶えていたこのパターンが出題が復活している。『問題集2』のTEST 2では2問も出題されていることも考え併せると、このパターンは新形式問題において出題されることが十分に想定できる。したがって、前回はこのパターンが新形式問題では引き続き出題されないことを推測したため、難易度予測の対象外となっていたが、この観点からみた新形式問題におけるPart2の難易度は、今回「易化する」に修正する。ただし、表3でみたように、選択疑問文の質問文の出題数はWH疑問文のそれとくらべて五分の一程度なので、「やや易化する」という表現にとどめたい。

さらに、純粋な「WH疑問文」ではなく「WH疑問文の形をとる依頼・提案の文」ではあったが、「WH疑問文と選択疑問文にYes/Noで答える選択肢は100%不正解である」という攻略法に対する例外のパターン(“How about holding a training seminar on the new database?”という質問文に対する選択肢である、“Yes, I think we should.”[『新形式』TEST 2-27番]が正答になっている)が発生していることを前回注意点として挙げた。しかし、今回の追加分析においてはこのパターンはみられなかった。もちろん今後も出題傾向を追っていく必要はあるが、『新形式』の「TEST 2-27番」が唯一の例外であると考え、この点からみる新形式問題におけるPart2の難易度は、今までと「変わらない」とすることができる。

ここで、もうひとつの攻略法である、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・

似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」についてみる。前回と同様にそれぞれの一例を挙げておくと、同じ語に関しては、“Don't you know how to use the new computer system?” という質問文に対する “No, she doesn't use it.” という選択肢（『問題集1』TEST 1-30番）、似た音の語に関しては、“Do you know who this jacket belongs to?” に対する “It won't take too long.”（『問題集1』TEST 2-17番）、派生語に関しては、“Do you have this same T-shirt design, but in blue?” に対する “Thanks, I'll tell the designer.”（『問題集2』TEST 1-29番）がある。

表5 質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む誤答選択肢の分布

Vol. 1	Vol. 2	1 + 2	Vol. 5	Vol. 6	5 + 6	新形式	問題集1	問題集2	新形式 合計
53.3	41.7	47.5	22.5	23.3	22.9	27	36	34	32.3

上の表5は、これまでに分析してきた Part 2 の質問文に対する選択肢に関して、すべての誤答の選択肢の総数に対して、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」のなかの誤答選択肢の数が占めるパーセンテージを算出したものである（小数点以下第四位を四捨五入）。前回の『新形式』のみの分析での「リニューアル後の後期」を4ポイントほど上回っていた数値は、今回の分析では、「リニューアル後の後期」を9ポイント以上上回るという急激な上昇をみせている。いっぽう、質問文に対する誤答の選択肢の両方ともに「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」が含まれている問題の数、すなわち、音声のみで正答にたどりつける問題の数は、「リニューアル後の初期」で多すぎたといえる29問が、「リニューアル後の後期」で8問（ひとつの TEST の30問につき2問で6.6%）と落ち着き、分析を加えた「今回のリニューアル」では9問（ひとつの TEST の25問につき1.5問で6%）というほぼ横ばいの数字になっている。以上のことから、「リニューアル後の初期」のような音声のみで正答にたどりつける問題が高いパーセンテージを占めることは今後もあり得ないが、そのいっぽうで、新形式問題において、ふたつの誤答選択肢の片方に「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」が占めるパーセンテージが、すなわち、受験者がこの Part 2 の三択の問題を二択の問題にしぼり込める設問の割合が高くなっているのである。前回の分析では、新形式問題におけるこのパターンの出題が25%前後の数値に保たれることを想定したので、この観点からみた新形式問題における Part 2 の難易度を「やや易化」と予測したが、今回の分析結果からは5

ポイントほどの出題の増加が想定できるため、「やや易化」から「易化」へと予測を修正する。

それでは、前回と同様に、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」と「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」というふたつの攻略法を合わせた「誤答の選択肢」を分析し、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点からの Part 2 の新形式問題における難易度を予測してみたい。

表6 ふたつの攻略法を合わせた誤答選択肢の分布

Vol. 1	Vol. 2	1 + 2	Vol. 5	Vol. 6	5 + 6	新形式	問題集 1	問題集 2	新形式 合計
60.8	47.5	54.2	25	30.8	27.9	35	40	36	37

上の表6は、これまでに分析してきた Part 2 の質問文に対する選択肢に関して、すべての誤答の選択肢の総数に対して、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢」と「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」のなかの誤答選択肢の合計数（ひとつの選択肢に両方の要素が重なっている場合には、のべ数とせず1と数えた）が占めるパーセンテージを算出したものである（小数点以下第四位を四捨五入）。前回の分析時において「リニューアル後の後期」を7ポイント程度上回っていた「今回のリニューアル」の数値は、今回の『問題集1』と『問題集2』を加えた分析においても「リニューアル後の後期」を9ポイント程度上回っている。この数値から考えると、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点からみた新形式問題における Part 2 の難易度は、前回と同様に、はっきりと易化傾向を示している。

ここまで、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点から新形式問題における Part 2 の難易度を予測してきたが、最後に、攻略法について修正をしなければならないことを付け加えておきたい。前回の『新形式』のみの分析では、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」に関して、 $27 \div (27 + 31) = 87.1\%$ （小数点以下第四位を四捨五入）というように85%を上回り、この攻略法が新形式問題においても変わらず効果的であることを述べた。しかし、今回の分析では、『問題集1』では $36 \div 41 = 87.8\%$ であったが、『問題集2』では $34 \div 46 = 73.9\%$ というように85%を大きく下回る数値となった。「今回のリニューアル」全体では $97 \div 118 = 82.2\%$ であるため、

85%を大きく下回っているとは必ずしも言えないものの、最新の『問題集2』の TEST 1 で $18 \div 23 = 78.3\%$ 、『問題集2』の TEST 2 で $16 \div 23 = 69.6\%$ というように、両方の TEST で85%を大きく下回っているという事実を無視することはできない。したがって、もちろん今後の出題傾向を注視していく必要はあるが、この攻略法については、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、80%が不正解である」というように、85%から80%に下方修正することが自然な流れであろう。この5ポイントの低下の観点からすると、新形式問題における Part 2 の難易度はやや難化の傾向を示すことになるため、すぐ上では「はっきりと易化傾向を示している」と述べたばかりであるが、全体としては「やや易化の傾向」というように修正しなければならない。

## 5. お わ り に

本論文では、前回の論文以降に発刊された公式問題集の Part 2 の問題100問を加えた総計390問の Part 2 の問題を、「リニューアル後の初期」、「リニューアル後の後期」、そして、「今回のリニューアル」という3つの段階に分け、「質問文の語数」、「質問文の種類」、そして、「質問文に対する誤答の選択肢」という3種類の観点から分析を行なうことを通して、「今回のリニューアル」の Part 2 の出題傾向が以前のものとのちがいがいるのかどうかを見極めることで、新形式問題における Part 2 の難易度を再度推察してきた。

まず、「質問文の語数」の観点からであるが、「質問文の語数の平均値」からは新形式問題における Part 2 の難易度は変わらないことが読み取れ、「質問文の語数の分布」からも、6語未満の短い質問文が変わらず出題されることと、8語の質問文が急激な増加傾向にはなく、その8語の質問文の減少分が10語以上の質問文の増加分に転じているが、その割合は「リニューアル後の後期」の割合にほぼ戻っただけであることがわかった。したがって、「質問文の語数」という観点からは、今回の分析では前回の「難化」という予測とは異なり、Part 2 の難易度は「ほぼ変わらない」ことが予測できた。

次に、「質問文の種類」の観点からは、問題の難易度がほかの質問文の問題とくらべるとかなり高くなる「肯定文と否定文」について、今回の追加分析によって、その出題数が減ることがよりはっきりと予測できた。また、多くの日本人英語学習者にとって苦手な3つの文法事項である、「否定疑問文」、「現在完了形、または、現在進行形」、「受動態」のうちの2つが組み合わされた質問文の出題が今回の分析分で復活していることがわかったが、現時点では「リニューアル後の初期」と「リニューアル後の後期」における出題数を

下回っている。したがって、「質問文の種類」という観点からは、前回の予測どおり、Part 2 の難易度は「易化する」ことが想定できた。

最後に、「質問文に対する誤答の選択肢」の観点からである。WH 疑問文に Yes/No で答える選択肢については、「リニューアル後の後期」とほぼ変わらない割合で出題されるであろうことから「変わらない」ことが、選択疑問文に Yes/No で答える選択肢については、その出題が復活していることから「やや易化する」ことが読み取れた。また、誤答選択肢の中に「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」が占める割合が上昇していることから、「はっきりとした易化」が示されているようにみえるが、そのいっぽうで、その種類の選択肢が正答である出題が増えており、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85% が不正解である」という攻略法の数値を80%に下方修正しなければならなかった。したがって、「質問文に対する誤答の選択肢」の観点からは、Part 2 の難易度は「やや易化する」に落ち着いた。

以上、3種類の観点からの分析が、「ほぼ変わらない」、「易化する」、「やや易化する」であることから、本論文での総合的な結論は、「新形式問題における Part 2 の難易度は下がることが予測される」である。ただし、本文中で触れたように、新形式問題における最新の『問題集2』だけの数値をみると、難易度が上がる傾向を読み取ることができるため、今後の出題傾向を注意してみていくことが必要である。

## 引 証 文 献

- [1] Educational Testing Service. 『TOEIC® テスト 新公式問題集』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2005.
- [2] —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 2』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2007.
- [3] —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 3』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2008.
- [4] —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 4』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2009.
- [5] —. 『TOEIC® テスト 公式プラクティス リスニング編』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2011.
- [6] —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 5』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2012.
- [7] —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 6』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2014.
- [8] —. 『TOEIC® テスト 公式問題集 新形式問題対応編』東京：国際ビジネスコミュ



- ニケーション協会，2016.
- [9] —. 『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集1』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2016.
- [10] —. 『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集2』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2017.
- [11] 井上 治. 「TOEIC® テスト 初級者のためのリスニング・セクション パート2 攻略法——ETS 作成問題の分析を通して」『生駒経済論叢』（近畿大学経済学会）第4巻第3号（2007年3月）：47-59.
- [12] —. 「TOEIC® テスト 初級者のためのリスニング・セクション パート2 攻略法再考——近畿大学経済学部の TOEIC® テストへの取り組みとともに」『生駒経済論叢』（近畿大学経済学会）第6巻第2号（2008年10月）：115-131.
- [13] —. 「TOEIC® テストの新形式問題におけるパート2の難易度を推察する——ETS 作成問題の分析を通して」『生駒経済論叢』（近畿大学経済学会）第14巻第2号（2016年11月）：27-40.